



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イエメン：フーシー派の進撃で国際航路への影響の恐れも

イエメンの政情が急速に悪化し、国家崩壊の危機に瀕している。15日付の『シャルク・ル・アウサト』紙は、「イエメンは解体する・・・北部はフーシー派が制圧、南部は独立を要求」との見出しで事態の深刻さを報じた。イエメンでは、8月以来北部のサアダ県などを拠点とするフーシー派と呼ばれる宗派・政治勢力が政府に対する抗議行動を強化、9月下旬には同派の戦闘員が首都サナアの官公庁や軍・治安部隊の拠点を占拠した。フーシー派はさらに進撃を続け、14日には紅海に面するイエメン随一の港湾都市であるフダイダ、16日にはハッジャ県にあるサウジアラビアとの国境通過地点をも制圧した。フーシー派とは、イエメン北部を主な居住地とするシーア派の一派であるザイド派の信徒が、1980年代半ばからバドルディーン・フーシーを指導者として「アンサール・アッラー」、「信仰青年」などと呼ばれる団体を形成するようになったものである。フーシー派は、2004年からイエメン政府との武力衝突を繰り返し、2004年にバドルディーン、次いで息子のフサイン・フーシーが武力衝突の中で死亡し、現在のアブドマリク・フーシーが指導者となった。彼らの宗派的な帰属は、シーア派の一派のザイド派であるが、この宗派はイランなどのシーア派の間で主流の12イマーム派とは異なる宗派である。

フーシー派が政府に対する抗議行動を強化した直接のきっかけは、経済改革の一環として石油製品の価格が大幅に引き上げられたことである。フーシー派は2011年に発生した政変後の政治過程の一部として編成された挙国一致内閣の打倒を目指し、デモ・座り込みを中心とする抗議行動を行った。しかし、国連の仲介などにより石油製品価格の問題、フーシー派の参加拡大を含む挙国一致内閣の再編についてはいずれも政府とフーシー派との間で合意が成立している。それにも拘らず、フーシー派はサナア以外にも戦闘員を進撃させ、各都市や行政機関・軍事拠点の占拠を続けている。こうした進撃は、かねてからフーシー派を敵視して攻撃を繰り返してきた「アラビア半島のアル=カーイダ」や、その地方展開版である「アンサール・シャリーア」との戦闘を誘発している以外、さしたる抵抗を受けていない。イエメンの国家機関は、フーシー派との衝突を回避しているだけでなく、一部ではこれに同調・迎合している模様である。

フーシー派の進撃により、同派の占拠地域が南方に拡大したことは、「アラビア半島のアル=カーイダ」との衝突激化につながる。また、フーシー派がフダイダの港湾を占拠したことにより、紅海、ひいてはヨーロッパとアジアとを結ぶ国際航路の重要地点であるバブ・マンディブ海峡の航行の安全にも影響が及ぶとの懸念がある。さらに、政情の混乱を受け南イエメンの独立運動グループが南イエメンの復活を要求して無期限の座り込みを始めた。この結果、これまでの政治過程で積み重ねられてきた政治制度や権益の配分についての合意はほとんど顧みられなくなった。

フーシー派関連地図



地図出典：

http://www.worldmapfinder.com/Map_Detail.php?MAP=120971&FN=Yemen_Map.jpg&MW=1938&MH=1569&FS=439&FT=jpg&WO=0&CE=2&CO=170&CI=0&IT=0&LC=3&PG=&CS=utf-8&FU=http%3A%2F%2Fwww.freemapviewer.com%2Fja%2Fmap%2F+%92n%90%7D-%83C%83G%83%81%83%93_191.html&SU=http%3A%2F%2Fwww.freemapviewer.com%2Fja%2Fmap%2F+%92n%90%7D-%83C%83G%83%81%83%93_191.html

評価

現在のイエメンの政治過程は、「アラブの春」が波及する形で生じたイエメンの混乱を収束させ、政権を円滑に移行させるため進められてきた。ここまでの過程で、カタールを中心とするGCC 諸国が政治的移行や各当事者間の交渉に積極的に介入してきた。しかし、GCC はイエメンが失敗国家となることを容認しないという立場を表明しているものの、現在の混乱の諸当事者間の協議を仲介したり、事態收拾のための提案をしたりする気配がみられない。また、国連安保理なども現在の情勢に懸念を表明しているが、今のところ特定の主体に制裁を科したり、積極的な仲介をしたりする動きは顕在化していない。通常、GCC や国連は、イエメンの政情が混乱するたびにイランの干渉やサーリフ前大統領支持者の妨害を非難してきた。今般も、フーシー派とサーリフ前大統領支持者との連携が取りざたされているが、この点についても GCC や国連の反応は鈍い。

この混乱の国際的な影響については、15日『シャルク・ル・アウサト』紙は、フーシー派はイエメン北部の内陸の諸県で活動していたため、同派がフダイダのような沿岸部を制圧しても直ちに国際航路に影響を及ぼすような行動には出られないとの見通しを報じている。しかし、フーシー派の進撃やアル=カーイダの活動、南イエメンの独立運動などが複合する事態を受け、イエメンは国家解体の危機に瀕しているとも言える。

(高岡上席研究員)

©本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。

ご質問・お問合せ先 公益財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799